

# 英語教育における小中連携：文字指導のあり方

川上 典子

キーワード：文字指導，文字の認識，アルファベット，ローマ字，フォニックス

## 1. はじめに

平成 23 (2011) 年度より小学校 5・6 年生で外国語活動が必修になり、全国のすべての小学校で年間 70 時間の外国語活動が行われている。また、その目標は、言語・文化の体験的理解、コミュニケーションへの積極的態度の育成、英語の音声や基本的表現への慣れ親しみ、そして、コミュニケーション能力の素地の涵養である。これらは、中学校外国語の目標に直結し、4 技能のコミュニケーション能力の基礎の育成につながる。外国語活動の内容は、『英語ノート 1・2』やその後に文部科学省から出された『Hi, friends! 1・2』によって示されている。

一方、中学校では、学習指導要領改訂により英語の時数が週 3 時間から週 4 時間に増えた。指導内容は文法事項についてはほとんど変わらないが、語彙数は 900 語から 1200 語に増えた。しかし、小学校外国語活動で 200 から 300 の単語が扱われているので、生徒の負担はあまり大きくないと考えられる。教科書も新しい学習指導要領に沿って改訂がなされ、時数が増えたことに対応してどの出版社の教科書もページが増え、単語や英文の量も増えている。平成 24 年度より新しい教科書で週 4 時間の授業が行われている。

この改訂によって、中学校英語は小学校の外国語活動を踏まえて指導にあたるのが明記され、さらにこの時数増によって、コミュニケーション能力の基礎を育成する環境が 1 つ整ったと言える。小中連携を考える上で、大きな前進である。8 年前に書いた拙稿 (2006) における小中連携の状況は、研究開発校であった小学校が他の 2 つの小学校との小小連携を取りつつ、中学校との連携に取り組んでいたが、他の小学校は研究開発校と同じ時数を確保できないため

足並みが揃わず、連携の難しさやもどかしさを実感していた。当時は、英語活動が「総合的な学習の時間」の枠内で学校の裁量で行えたために、小学校同士の時数や内容のばらつきが大きく、中学校ではその「ばらつき」に対応するために苦慮していた。この大きな「ばらつき」については、全国的にかなり解消されたことになる。

このように制度的には、外国語活動が中学校英語につながるように整えられてきたが、実際に小中連携がスムーズになされていると言えるのだろうか。教師の指導面での連携は、まだまだ改良の余地がありそうである。改訂されて1年しか経たないため中学校での英語力の伸びを示すデータはまだ目にしていないが、児童生徒の立場からは小学校外国語活動から中学校英語科へのギャップは大きいと言える。そのギャップを小学校と中学校の教師同士が指導の内容・方法・評価の面で連携していく必要がある。

中学校では新課程2年目に入り、小学校外国語活動を経験した生徒の変化は感じているようである。中学校の英語教師は、外国語活動を経験した生徒について、リスニング力がすでにある程度あるので最初から教師が英語で言うことに反応する、ALTに対して物怖じしないなどの点を肯定的に捉えているようだ。しかし、新しい教科書で指導する上で単語数が増えて生徒がそれに対応できない、すでに英語嫌いの生徒の対応に困るなどの声も聞く。単語が覚えられないとか、音読が出来ないことを、生徒の努力不足と片付けるのではなく、文字指導を徹底する必要があるのではないだろうか。外国語活動で英語に慣れているので、これまでの英語授業の初期段階を端折って進めるのではなく、慣れ親しんだ英語の音声で文字で表現する文字指導については、これまで同様に丁寧に行う必要があることを肝に銘じるべきだろう。また、新しい教科書については、語彙数が増えたため、1時間の授業で扱う新出単語の数が増えたのは理解できるが、連携を意識するのであれば、1年生の1学期は新出単語数を極力抑えるような工夫を教科書作成の際すべきではないだろうか。

外国語活動の体験をして中学校へ上がり、これまでの未体験の生徒とは違う集団になっているのだから、それに対応して中学校の英語教師は自分の指導法

を見直す時期なのである。特に生徒は何を経験し、それを通して何を理解し、またしていないか、何ができて、またできないか見極めることが大切である。それが「外国語活動を踏まえて」行う授業の前提で、その上で、生徒に合った指導法を模索しなくてはならない。音声での反応が返ってきたからと言って、生徒は文法がわかって英語を組み立てているのではなく、丸ごと耳で覚えている場合もある。だからと言って、文法説明が長くなると、英語への興味が低下する可能性もある。音声による活動とその他のバランスを取りながら、文字指導を行い、文法事項を理解させ、定着させていくのは、なかなか大変なことである。特に中学校1年生のはじめでは、文字を覚えさせ、単語が書けるようになり、文を書くときのルールを指導するところまで中学校英語での第一の関門と言えるだろう。

生徒はこの関門を越える体力をコミュニケーション能力の素地として小学校で身につけているはずだが、文字が出てくる段階でついていけなくなる生徒がいることも事実であるようだ。実際に中学校2年生の英語の教育実習生の授業を見る機会があり、実習生が能力的に2極化したクラスを苦勞して指導していた。上位層の生徒は反応もよく音読の声も出ているが、下位層の生徒はやる気を失い、音読のときもほとんど声が出ていない状態だった。音読ができない生徒がいることは予想していたが、教師が作成したプリントの英文にカタカナが振ってあるのを見たときは大変驚いた。他の学校で実習を行った学生たちも同様の経験をしていて、音読が出来ない生徒の多さは予想以上だったと報告してくれた。

文字指導の問題が外国語活動の導入によって出てきた問題とは思えないが、外国語活動の導入で解消されず、逆に2極化を生んでいるのは事実のようである。この問題に対しては、中学校の英語教師が英語指導の専門家として責任を持って全うすべきである。特に中学校1年生の1学期の指導が大変重要な意味を持つ。生徒が小学校での歌やゲームで楽しい外国語活動のイメージを中学校英語へ持ち込むと、暗記の多い英語の学習に対して学習意欲を失って、宅習を含めた継続的な学習習慣や英語の学習方法を身につけないままに1学期を過ご

してしまい、試験の結果にがっかりするということも起こるだろう。動機付けの維持と学習の習慣付け、そして徹底した文字指導を中学校の最初で指導しておくことが大切である。

本稿では、文字指導における2極化を回避する方法を小学校段階に絞ってみていくことにする。文字指導は中学校で本格的になされる内容だが、小学校外国語活動にアルファベットの認識が上げられている。筆者は、小学校の授業に年間を通してゲスト・ティーチャー（GT）として、あるいは実習生の指導者として参観し、学級担任を中心とする指導や児童の反応を見ている。今後、小学校で外国語活動が時数増になり、教科化になる可能性があることを念頭に置きつつ、小学校での可能性を探りたい。本稿では、まず次章で、小学校での外国語の文字指導について調べる。次に、『Hi, friends! 1・2』に扱われている文字を使った活動中心に具体的な文字指導に関する活動例を挙げ、文字指導において中学校英語へ効果的につなぐ方法を模索したい。

## 2. 文字指導

文字指導には、アルファベットの文字認識から始まり、リーディングとライティング指導へと分かれる。アルファベットは、世界でも多くの国で使用されているが、表記法は各言語で異なっている。英語の表記法、つまり単語を綴る方法は、英語を母語とする子どもにとっても難しく、イタリア語やスペイン語を話す子どもより習得に時間がかかると言われている。ましてや、外国語として英語を習得する日本の子どもたちが英語の表記に慣れるのはかなりの時間がかかるのは当然のことと言えるだろう。

日本の児童は、「国語」の授業のローマ字学習によってアルファベットの知識をある程度持っている。その結果として、ローマ字を知っているから英語も表記できるという勘違いをする児童は少なからずいる。中学生になってからその勘違いに気づくのが遅れると、ローマ字と英語の混乱を整理することが出来ずに英語の表記法を学べず、単語の綴りが覚えられない事態になりうる。綴りのルール性を見出さずにやみくもに書いて覚えようとしても、綴りが覚えられ

ない。覚える努力をしても単語が書けないということは、単語自体をなかなか覚えられないということになる。単語が書けなければ、文を書くのはさらに大きなハードルで、試験では選択肢から選んで回答する以外は回答できないことになり、試験の点数が取れない、つまり英語ができないという思い込みへとつながる。

小学校教員から小中兼務教員として教鞭を取っている樋田氏（2008）が岐阜市の中学校で5月に行った1年生へのアンケート調査によると、「書くこと」への抵抗感が「読むこと」より強く、次の4つをその理由として挙げている。

- 1) 英語とローマ字の表し方が違うことが難しい。
- 2) アルファベットの組み合わせが難しい。
- 3) 記号や大文字で書くときなどの決まりが難しい。
- 4) アルファベットを覚えるのが難しい。

さらに、「書くことが難しい」と回答した生徒の7割以上が1)の英語とローマ字の表記の違いを理由に挙げている。さらに、樋田氏は、ローマ字は小学校4年生で（現在は3年生）数時間しか学習しないにもかかわらず、コンピュータを使つてのキーボード入力でもローマ字入力が多く、その影響は大きいと述べている。

中学校でこのような「書くことが難しい」と感じ英語嫌いに陥る事態を避けるために、小学校段階でどのような手立てが可能だろうか。次の表1は、現在の文字指導の流れを示している。

3年生	「国語」でローマ字（訓令式）の学習	
5年生	『Hi, friends! 1』Lesson 5で大文字の認識	
6年生	『Hi, friends! 2』Lesson 1で小文字の認識	
中学生		アルファベットが書ける
	単語が読める	単語が書ける
	英文が読める	単文が書ける (文頭大文字, ピリオドなどのルール)
	音読できる	文が複数書ける (まとまりのある文章)

この流れの中では、まず、ローマ字の学習を生かすことである。3年生でのローマ字の学習後、文字に関する調べ学習などで文字を取り上げることで文字への興味が増し、さらに外国語活動でローマ字と英語アルファベットの混同を整理しておくことはできる。これで書くことへの抵抗感を持つ理由の1)「英語とローマ字の表し方が違うことが難しい」に対する手立てになる。次にアルファベットを使った遊びによって、文字への興味を高め文字に対する抵抗を減らすことは出来る。理由4)「アルファベットを覚えるのが難しい」への手立てである。さらに、理由2)「アルファベットの組み合わせが難しい」への手立てとして小学校でも無理のないフォニックスの方法を考えてみたい。理由3)「記号や大文字で書くときなどの決まりを覚えるのが難しい」については中学校での学習事項であるが、小学校では英語絵本の読み聞かせをすることで、英文の表記を見る機会を作ることができる。ここに挙げた3つの手立て、ローマ字とアルファベットの指導、フォニックス、絵本について、それぞれ以下に詳しく述べたい。

### (1) ローマ字とアルファベットの指導

ローマ字の指導は小学校3年生の「国語」でなされている。このとき、訓令式のローマ字表を示すことによって、日本語は母音 (a, i, u, e, o) と子音 (k, s, t, n, h, m, y, w) からできているということを実感的に理解させることができる。これは新しい文字を学ぶことと同様に音声の仕組みの学習としても重要と言えるだろう。日本語の音を音素に分けることで、「あ」行以外は基本的な音はCV (子音 + 母音) の組み合わせで出来ていることを理解するようになる。そして、英語の音声に出会い、英語がCVCの音声パターンを持つことを意識した時に、日本語の音は基本的には母音で終わり、それが日本語の音の特徴であることに気づくだろう。音を音素に分ける力は、音韻認識力の1つであり、英語の音の理解のためにも大変役立つ。ローマ字学習を音韻認識の第1歩することを提案したい。

しかし、現行の学習指導要領には、「第3学年においては、日常使われてい

る簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、また、ローマ字で書くこと。」としか書かれていない。これまで4年生でローマ字が扱われていたのが3年生に早まったのは、「ローマ字表記が添えられた案内板やパンフレットを見たり、コンピュータを使う機会が増えたりするなど、ローマ字は児童の生活に身近なものになっている」ためと説明している。ローマ字は、音素の学習や、ローマ字の入ってきた経緯から歴史の学習、その使用場面を扱うことで地域のグローバル化などの学習へ、広がりを持った学習の素材であるはずなのだが、現在の学習指導要領にそうした記述が全くないのは寂しい限りである。小学校の教師の力量でローマ字学習を豊かな学びにつなげてほしいものである。

その具体策としては、「総合的な学習の時間」などの時間で世界の文字に関する調べ学習の機会を作って、ローマ字は何語を表す文字なのか、日本でローマ字を使う理由は何か、アルファベットの名前の起源は何語でアルファベットの文字はどうやって作られたのか、などについて児童自身に調べさせることができる。日本語を含めて文字に対する興味が高まり、ローマ字とアルファベットの違いも理解でき、アルファベットに対する親近感がでてくるのではないだろうか。

ローマ字は、ラテン語の文字である。ラテン語は紀元前8世紀～5世紀に栄えたローマ帝国からの遺産であり、中世ヨーロッパでは学問においてはリングフランカとして使われた。日本にローマ字で書かれた文献が出て来るのは、日本が西洋との関係を持ち、キリスト教の布教のために西洋人が日本に入ってきた16世紀である。そして、日本語が読めない西洋人へ日本語を表記するために使われるようになった。日本語は、表意文字である漢字と表音文字であるひらがなとカタカナ、そして表音文字でアルファベットを使うローマ字の4種類の文字を持ち、それぞれを使い分けている。このような日本語の文字の特徴も、ローマ字学習から見えてくるだろう。

アルファベットという名前は、ギリシャ語の文字の名前、アルファ「 $\alpha$ 」とベータ「 $\beta$ 」、つまり、アルファベットの最初の2文字に由来する。アルファベッ



トは、古代ギリシャ人が使っていた文字であった。それを後にローマ人が借用したのである。そして、アルファベットは、ギリシャ語やラテン語で使われただけでなく、英語を始め、その他多くの言語で使われるようになった。それぞれの言語の音体系に合わせてアルファベットの表記法は工夫され、文字の形や数、読み方を変えて使われている。そして、その起源は、エジプトの象形文字から長い年月をかけ、セム族を経てフェニキア人がその原型を作ったと考えられている。(阿原・瀧口, 2009) アルファベットの「A」は「牛の頭」を表し、「B」は「家」を表している。表音文字として使われているが、歴史をたどると象形文字であったというのは、大変興味深く、無機質なアルファベットのイメージを塗り替え、古代の先人たちの生活を想像させ、生活感が漂うものに見えてこないだろうか。

小学校3年生で学習するのは訓令式のローマ字だが、訓令式ローマ字は英語で読むと違う音になるものがいくつかあり、英語表記に近づけたのがヘボン式ローマ字である。訓令式とヘボン式の2つが存在することは児童・生徒を混乱させる悩ましいものであるが、歴史をたどると、どちらか1つに絞るというわけにはいかないようだ。幕末に来日したアメリカ人のジェームズ・カーティス・ヘボンが和英辞書を編纂し、英語の発音に準拠したローマ字を使用した。これがヘボン式の始まりである。これに対し、日本語の表記法としては正確でない部分があったため批判され、日本語の音体系に合わせて作られているのが日本式ローマ字である。ヘボン式で「ふ」を「fu」と書くが日本語には /f/ の音はなく、「hu」を使うべきである。2つのローマ字について激しく議論された結果、1937年に公式なローマ字法が内閣訓令第3号として公布された。それが訓令式ローマ字である。訓令式は日本式ローマ字に近く、ヘボン式を排除している。しかし、戦後アメリカの影響を強く受け、ヘボン式が再び使われるようになり、1954年に政府は改めて訓令式を交付し直し、ヘボン式の使用も認めている。実際にはヘボン式で表示されることが多く、パスポートの日本人の名前の表記もヘボン式である。中学校英語ではヘボン式ローマ字で指導している。

このような背景から、小学校3年生の「国語」では訓令式ローマ字を学習し、



中学校でいきなりヘボン式ローマ字が出てくるのである。訓令式やヘボン式の意味をある程度小学校で触れておかないと、中学校の授業でヘボン式で自分の名前が書けなかったために恥ずかしい思いをして英語嫌いの始まりを作ることにもなりかねない。外国語活動では是非ともヘボン式の表記を導入してもらいたい。ヘボン式に触れることで、英語表記とローマ字表記（訓令式）にギャップがあることの認識が生まれるはずである。ヘボン式ローマ字を通じて、英語表記に近づき、英語アルファベットとローマ字とは別であることが認識できるはずである。

アルファベットの指導は、『Hi, friends! 1・2』でも工夫されているが、文字をひたすら覚えさせるのではなく、身近なところに英語表記がいろいろあることを認識させ、それらを意識的に見るように仕向けていくことだろう。暗記が苦手でも、何度も触れることで、馴染んでくる。中学校ではそのような時間的余裕はないが、小学校では時間をかけることが可能である。英語の母語話者用に書かれた幼児向けアルファベットの絵本なども、小学生なら興味を持ってみることが出来る。アルファベットの具体的な指導法については、次章で述べる。

## (2) フォニックス

フォニックスは、英語の単語を読むときの文字と音のルールである。単語を「読むこと」は、中学校で指導することなので、フォニックスの指導も本格的には中学校で行うべきものと考ええる。しかし、「読むこと」の準備段階として、小学校で考えられるのが、文字付き絵カードの使用、絵本、そしてアルファベットの26文字についてのフォニックスなどであろう。絵カードは音と意味を結びつける働きがあるが、そこに文字を入れることにより、教師が文字に言及しなくても、児童は無意識に音と意味の結びつけの中に文字を見ていることになる。それだけで英語を読めるようにはならないが、文字に親しむことにはなるだろう。同じことが絵本についても言える。フォニックスについては、アルファベットを扱う際に、フォニックス・アルファベットの歌を歌ったり、『Hi, friends! 1』の文字探しの活動で、文字とその文字を使った単語を一緒に発音

することで、フォニックスを一部取り入れることができる。

小学校でフォニックスを指導する際は、英語の音と文字についてよく分かっている指導者が行うべきであろう。英語の発音に自信がない場合は、CDなどのモデルとなる発音を利用することができる。今後、小学校英語が時数増、そして教科化へと進んでいくことが予想されている。時数増に合わせて現行の外国語活動で扱う以上の内容が入ってくることを想定し、英語力の研鑽に加えて、小学校教師もフォニックスの知識や指導技術を身につけていくことが望まれる。

文字の英語表記は、野呂氏（松川・大下，2007）の説明によると、話し言葉の音素に対応する文字が一貫している正書法は浅い正書法と言い、フィンランド語やトルコ語がこの分類に入る。一方、文字と音素の関係が不透明な正書法が深い正書法で英語は最も深い正書法を持つとしている。英語を母語とする子どもでも英語を読むことが出来ない子どもが多く出るため、英語を母語とする国々では国語教育の中でフォニックスを導入し、英語を早く読めるように指導している。つまり、十分な音韻認識能力とアルファベットの知識が身に付いていることが、フォニックス学習の前提条件である。（アレン玉井，2010）深い正書法である英語のフォニックスの全容は、松香フォニックス（2002）の4冊にわたるワークブックを見て分かる通り、大変複雑である。以下にその内容を列挙する。

1. アルファベット
2. 6つの子音：p, b, t, d, c, g, f, h, j, k, l, , r, s, v, w, y, z
3. 短母音：a, e, i, o, u
4. 残りの子音：m, n, f, v, s, z, l, r, y, w, j, h, k, q, x
5. e のついた母音：a-e, e-e, i-e, o-e, u-e
6. 2 字文字子音：sh, ch, ph, wh, th, ck, ng
7. 礼儀正しい母音：ai, ay, ea, ee, ey, oa, oe, ow, ui, ue, ie
8. 連続子音：bl, br, cl, cr, dr, fl, fr, gl, gr, pl, pr, sk, sl, sm, sn, sp, st, sw, tr, tw,

9. 2 文字母音：au, aw, ou, ow, oi, oy, oo

10. r のついた母音：ar, or, war, ir, er, ur, wor, air, ear, ire, ore, our

11. おまけの規則：y, all, al, o, i, u, o, ou, wr, kn, gh

12. 語尾変化

これらのルールを全部覚えるのは、大変時間がかかり、単なるルールとして覚えるのは大変苦痛を伴うということを指導者は理解した上で指導すべきだろう。この中でも比較的容易に小学校で扱えるのは、1 番目のアルファベット（2 番目から 4 番目を含む）である。具体的な指導例は次章に述べる。

### (3) 絵本

小学校では、英語のまとまったインプット量を増やすために、英語絵本の読み聞かせが大変有効である。英語の音声から入って絵があるので意味が伝わりやすく、繰り返しの言葉が多用されている絵本を選ぶと、数回読むうちに児童は耳で覚えた英語と一緒に繰り返して言うようになる。その段階で、繰り返しの部分を読むときに、書かれた文字を指で指していくと、音と文字が一致してくる。英語を母語とする子どもが文字を覚える方法の 1 つであるが、外国語であっても、何度も見て文字を見てそれを音でなぞっていくことで、文字に慣れ親しむことになる。文字への抵抗をへらすことができるだろう。また、英語の大文字で始めて、ピリオドで終わる英文を書くときのルールに慣れることが出来るだろう。

外国語活動の 70 時間は『Hi, friends! 1・2』を使用して指導した場合、内容が盛りだくさんなので、絵本の読み聞かせをする機会は『Hi, friends! 2』の Lesson 7『We are Good Friends. (桃太郎)』以外は時間が取れない可能性もある。授業で使用する教材というよりは、学校の環境整備の一環として、英語絵本の数を増やし、それを有効利用していただきたい。中学年・低学年でも機会があるごとに発達段階に合った英語絵本の読み聞かせをすることもできるだろう。英語があまり分からなくても、ある程度絵で内容が分かるものであれば、読み聞かせをすることで、英語のリズムに触れて、文字への興味を持たせるこ

ともできる。

### 3. 文字指導の実際

ここでは、『Hi, friends! 1・2』における文字を使った活動を取りあげ、文字指導の内容や方法について述べる。また、それ以外で筆者がゲスト・ティーチャー（GT）として参加した小学校の4年生の7月の単元「アルファベットを覚えよう」と「today's alphabet」の活動も紹介する。

#### (1) 『Hi, friends! 1・2』における文字を使った活動

『Hi, friends! 1』においては、文字や文字を使った活動が出てくるのは以下の表の通りである。

単元	活動名	活動内容
Lesson 1	名刺交換	自分の名前をローマ字で書く。
Lesson 6	大文字探し	絵の中から大文字を探す。
	ポインティングゲーム	聞こえた文字を絵の中で指さす。
	線結び	聞こえた文字を線で結ぶ。
	文字カード集め	集めた大文字カードを書く。
	見つけた大文字の視写	身近な大文字を探し視写する。
Lesson 7	アルファベットパズル	ピースを組み合わせて大文字にする。

Lesson 1 の名刺交換・名刺づくりは、あいさつの単元で行う活動なので、名刺を作る必然性があり、クラス替え直後で教室の友達の名前を覚えていなければ、本来の名刺のやり取りを楽しむことが出来る。名前を書く際は、ヘボン式ローマ字で書くよう指導する。ALT に訓令式とヘボン式で同じ名前を読んでもらい、訓令式は英語母語話者にとって本来の名前と読み方が異なる場合があり、ヘボン式で表記したものはより実際に近く発音してもらえることを実感させるとよい。そして、ヘボン式ローマ字は英語の表記法に近く、ローマ字と英語のアルファベットは違う言語であることに触れて欲しい。また、この活動では、名刺に名前だけでなく、好きなものを裏に記入し、名刺のやり取り以外に名刺裏の好きなものから誰かを当てるクイズも出来る。

Lesson 6 の絵の中から大文字探しは、4 年生の児童も夢中になって探していた。この活動は、例えば「B」の字が隠れているのが book store という仕掛けで、フォニックスが指導できるようになっている。フォニックスでは「B」の文字は名前が「ビー」で、単語として使われると /b/ の音で読まれるというルールを教える。したがって、『Hi, friends!』の中では「B の文字のある場所は、/b/, /b/, book store だね。」と言って、ルールを気づかせるのである。名前の「ビー」と読み方の /b/、そして B を使った単語をセットにして、歌にしたのが、松香フォニックスから出されている『フォニックス・アルファベット』である。この歌は、「A says /a/, /a/, /a/, apple. B says /b/, /b/, /b/ bear.」のように続き、ルールが歌を何度も歌うことで覚えやすくなっている。さらに、この文字探し活動の後は、身近な英語表記の物や看板を実際に見つけさせ一緒に読んでみるのが大事である。文字の認識が日常生活の中に広がり、文字への親近感が出るはずである。

Lesson 7 では、「クイズ大会をしよう」という単元でさまざまなクイズの形式が出てくるが、漢字を使用したクイズもあり日本語の漢字と同じ要領で、英語も作られている単語があることに気づくことになる。例えば、「向日葵」は太陽に向かう葵という意味の組み合わせから漢字が充てられ、同様の発想で、英語は “sun flower” となる。文字パズルはアルファベットの文字の形の詳細を認識させる活動である。同じような活動としては、黒板に文字を書いてその上に今まで使った数字や単語のカードを並べて隠し、児童にカードを 1 枚ずつはがしていき下の文字を当てさせることもできる。

『Hi, friends! 2』においては、文字や文字を使った活動が出てくるのは以下の表の通りである。

単元	活動名	活動内容
Lesson 1	表示の視写	町の絵の英語表示を書き写す。
	アルファベットクイズ	相手の視写した単語にどの文字が入っているか聞き、単語を当てる。
Lesson 7	絵本の読み聞かせ	『We are Good Friends.』の話を絵を見ながら英語で聞く。数回聞いて、教師の質問に答えたり、繰り返しのセリフを言うてみる。

Lesson 1 では、世界のいくつかの文字と一緒にアルファベットの小文字が取り上げられている。町の様子絵に英語表記の表示や看板が書かれていて、それを児童が見ることで日常目している英語を認識することができる。そして、各児童が書いた英語について、どのアルファベットが書かれているか尋ねながら、英語を当てるクイズである。

Lesson 7 では、英語での「桃太郎」の話の読み聞かせをまず楽しみ、何度か聞くとセリフの一部を児童は覚えていうようになり、その時に文字をなぞるようにすると、児童は文字にも意識が向く。さらに繰り返すと児童たちはセリフを覚え、今度は役を決めて演じたくなる。教師がそのように仕向けていくわけだが、書かれたとおりに演じることも、自分たちでストーリー展開を変えたり、セリフを変えたりすることもできる。そうすれば自分たちのオリジナル劇になり演じる側も見ると楽しめる。その時にセリフをカタカナ表記するのは発音が日本語風になるので極力避けたい。基本は繰り返し音で覚え、英語で書いたもの、あるいは書いてもらったものを記憶の補助にすることはできる。

## (2) 薩摩川内市内の小学校での文字を使った活動例

本学が位置する薩摩川内市は、平成 18 年に内閣府から構造改革特別区域計画（特区）の認定を受け、市内のすべての小学校で 1・2 年生 10 時間、3・4 年生 25 時間、5・6 年生 35 時間の英語活動を行っている。他の地域と比べて 70 時間多く英語活動を行っているが、中学校の前倒しではなく、音声を中心

である。薩摩川内市の作成している年間計画を見ると、基本は5・6年生の外国語活動の内容を発達段階に合わせて配置し、同じテーマでも繰り返しながら語彙や表現を広げたり、薩摩川内市の紹介など郷土色を出した単元を盛り込むなどしている。文字に関しては、5年生に「誕生日カードを作ろう」と「クリスマスカードを作ろう」、6年生に「年賀状を書こう」の単元が組まれ、名前をローマ字で書いたり、メッセージなどを書写するようになっている。また、文字への興味が高まった児童に対しては、4年生に「カレンダーを作ろう」、「好きな曜日の時間割を作ろう」、「オリジナルランチメニューを作ろう」、5年生に「オリジナルタウンを作って紹介しよう」や「大好き、薩摩川内」の単元で観光マップ作りなど、英単語を書くことができる場面がいくつかある。

筆者の授業参加している小学校では内容的には市の年間計画に準じたが独自の年間計画を持ち、4年生からアルファベットの学習が入っていた。1年生から少しずつ英語に触れているので、英語の音に慣れており、文字としても3年生でのローマ字学習の記憶もまだ残っているので、指導の時期としては、問題ないようだった。

アルファベットの学習は、慣れが大変重要なので、時間をかけて行う必要がある。しかも文字の覚えるのが得意な児童とそうでない児童との差も大きい。個人対抗の活動ではできない児童が出てくるのでグループで協力して行くと、アルファベットに馴染んでいない児童も一緒に楽しむことが出来る。『Hi, friends! 1・2』の活動以外でアルファベットを使った活動は、「Don't Say "z" ゲーム」、「アルファベットビンゴ」、「体を使った文字づくり」、「文字ブロックを使ってABCの順番並べ競争」などである。アルファベットに馴染み、児童全員ある程度言える状態になったら、「Don't Say "z" ゲーム」ができる。これは、数字でよく行うゲームだが、グループ内で順番にアルファベットを言っていく。一人3文字まで言ってよく、最後の「z」を言った人が負けである。アルファベットがすぐに言えない児童や間違えて言ってしまった児童がいたら、グループで教え合うことがとても大事である。文字の形を覚えるためには、「体を使った文字づくり」が有効である。これは個人でもできるが、グループで大きな文



字を作るのも大変楽しい活動になる。

アルファベットを書く場合は、大文字は比較的覚えやすく、小文字が出てくると、文字の向きや点や短い横棒を書き忘れるなどミスが多くなるので丁寧な指導が必要である。書かせることを前提にすると4線の上にアルファベットを書いたものを提示するのが良い。大文字は、どれも4線の中段と上段を使って大きく書くが、小文字は中段を中心に上段を使う文字、下段を使う文字と分類できる。家に例えると、中段のみの1階建ての家、上段も使う2階建て、下段を使う地下室のついた家に分かれる。このような児童に分かりやすい説明で小文字の特徴を捉えさせると、記憶に残りやすい。また、大文字・小文字の両方を学習する際に、大文字を並べて提示し、その下に小文字を提示する。そこで大文字小文字の特徴を考えさせるとよい。文字の大きさだけが違うもの、大文字の一部が小文字になっているものなどしっかり児童に気づかせることで、記憶に残りやすくなるだろう。

アルファベットの指導は、中学校では1～4時間程度しか分配されていないため、26文字を無機質に扱い、生徒はひたすら暗記することになる。今後、外国語活動の時数増の動きがあつて、仮に小学校でアルファベットの指導が本格的に行われるようになれば、現状より時間をかけ、前述のような小学校ならではの指導がなされると、アルファベットで躓く児童生徒の数は、減るのではないだろうか。

この小学校ではアルファベットの学習の後、4年生2学期から、英語活動の時間の中で「today's alphabet」という帯活動の時間を3～5分程度取って、2文字ずつフォニックスの時間に充てていた。この学校では、英語活動の時間は担任が中心となり、GTや英語指導助手（ALT）をすることが多い。市販の教材を使い、毎回2文字ずつなので、担任教師が指導する場合でも負担に感じてはいないようだった。その教材は、ビッグブックの大きさで一枚にその大文字と小文字、さらにその文字を含む単語の絵が4つずつ書いてあり（例えば、「D」は「D」「d」の文字、dog, duck, doll, diceの絵）、AからZまで綴っている。これらを読み上げるだけでも、文字と音の関係が分かるように作られてい

る。子音の多くは音と文字が1対1の対応になるが、特に母音は複数の読み方を持つことにも気づくことになる。このカードに書かれている以外の単語を探させると、4年生であってもかなりの単語が児童から挙げられ、外来語の中でも英語由来のカタカナ語を意識したり、音から文字を考えるようになる。そして、自分の挙げた単語が違う文字で書かれていることが分かると、英語表記の複雑さに気づくのである。

このような指導は、この小学校が特区である薩摩川内市にあり、かつて文部科学省の英語科としての研究開発校の指定を受けていたという経緯からきているので、このような指導が市内のどの小学校でもなされているとは思わないが、学級担任が指導する英語活動で時数が増えるところのような指導も可能であるということは言える。本格的に単語や文を「読むこと」「書くこと」を中学校からにしても、小学校での文字への馴染みをしっかりつけることで、中学校での伸びが大きくなることは期待できるだろう。

## 5. おわりに

外国語活動が小学校に全国的に導入されて、3年目を迎える。導入前は、各都道府県や各市町村で外国語活動についての教員研修が盛んになされていたようだが、現在では下火になったようである。しかし、報道では、小学校英語の教科化へ向けた動きがあることを伝えている。学習指導要領は大体10年毎に改訂されているので、実際、次の改訂に向けた動きはここ数年で始まるはずである。グローバル人材の育成の必要性が強調される中、英語教育の充実がこれからますます強く叫ばれ、この流れの中で、小学校の外国語活動は時数が増やされ、いずれ教科として教えられるようになるだろう。

現在の70時間の外国語活動では小学校の高学年の学級担任が中心になって教えているわけだが、この先は誰が外国語活動を担うことになるのだろうか。英語専科の小学校教員を増やし英語専科に任すべきであるというような意見を聞くが、これは果たしてより良い選択になるのだろうか。これまで学級担任が外国語活動を指導することで、学級づくりの一環になっていただろうし、学級

担任なら「コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度」について他の教科での児童の姿と重ね合わせながら指導も評価もできる。他の教科での指導内容を外国語活動の内容にうまく盛り込むこともできる。また、児童の立場から自分をもっともよく理解している担任がいることで異質な言語に対しても安心して活動に取り組み、また身近な担任が英語をつかっている姿に親近感を感じることが出来る。そうした学級担任が外国語活動を行うことの良さを今後とも是非生かして欲しい。そのためには、外国語活動を指導できる小学校教員を増やすために、新たに教員研修を行うべきである。英語専科の教員が学校に一人ずつでも入るのであれば、英語専科とのチームティーチングを基本とし、英語専科による校内研修を充実させ小学校教員全体のコミュニケーション能力を高め、指導できる体制を作っていくのが急務であろう。

本稿は、中学校英語へのよりスムーズなつながりができるための小学校での文字指導への手立てを考えた。英語を「読むこと」「書くこと」の指導は中学校へ任すにしても、文字に慣れ親しむことは小学校でも可能である。英語音声を中心に活動を行うことはもちろんだが、アルファベットに歌で繰り返し触れ、体を使ったり、ゲームの中にうまく取り込むことでアルファベットにもっと馴染むことが出来る。こうした指導のアイデアが小学校で広く共有され、中学校へのよいつながりとなることを期待したい。さらに、今後は中学校での入門期の文字指導についても研究を進めたい。

#### 参考文献：

- 阿原成光・瀧口優 編著 (2009)「どうする小学校英語」大月書店  
アレン玉井光江 (2010)「小学校英語の教育法」大修館  
大谷大照・堀内克明 監修 (2002)「社会人のための英語百科」大修館  
川上典子 (2006)「小学校英語教育：平佐西小学校の小中連携の取り組みから」  
『国際人間学部紀要』鹿児島純心女子大学  
樋口光代 著、松川禮子 監修 (2008)「小学校英語ホップ・ステップ・中学！」  
文溪堂

バトラー後藤裕子 (2005) 「日本の小学校英語を考える—アジアの視点からの  
検証と提言」三省堂

J. ブルースター／G. エリス (2005) 『『小学校英語』指導法ハンドブック』  
玉川大学出版

松川禮子・大下邦幸 (2007) 「小学校英語と中学校英語を結ぶ」高陵社書店

文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説：国語編」東洋館出版

文部科学省 (2008) 「小学校外国語活動研修ガイドブック」旺文社

吉島伊茂／長谷川弘基 編 (2004) 「外国語教育Ⅲ 幼稚園・小学校篇」朝  
日出版社

吉島伊茂／長谷川弘基 編 (2004) 「外国語教育Ⅳ 小学校から中学校へ」  
朝日出版社

Pinter, Annamaria (2006) *Teaching Young Language Learners*, Oxford  
University Press

---

**論文要旨**

---

## **How to Coordinate Elementary School English Education with Junior High English Education: Instruction of Written English**

KAWAKAMI Noriko

This paper focuses on how to coordinate English education in elementary schools with junior high schools in terms of instruction of written English. The new English curriculum which started in junior high school in 2012 aims to improve the teaching conditions for junior high English teachers; as well as students' English skills, by adding one more class a week with the new Course of Study based on the 70-hour Foreign Language Activities in elementary schools. Nevertheless, some junior high school students seem to have difficulties in learning written English and in memorizing vocabulary.

I will suggest some ideas to enhance the readiness of written English for elementary school students. There is much to be improved in the instruction of Roman letters and the English alphabet, and alphabet phonics. The reading of English picture books can also be introduced. In addition, I will discuss the English writing activities in “Hi, friends! 1・2” — the activities' books published by MEXT — as well as other possible activities.